

50 年前の「形式卒業者」の叫びとその波紋

A Study of the Cries and Ripples of Junior High School Graduates who Graduated 50 Years Ago Without Substance

金 益 見・水 本 浩 典
KIM Ikkyon MIZUMOTO Hironori

は じ め に

戦後の混乱期の中で社会的・経済的理由で学校に通えなかった不就学・長期欠席の子どもたちが夜に通う（夜なら通える）学校として始まった夜間中学¹⁾は、「あってはならないが、なくてはならない」学校と表現されることがある。それは夜間中学が、近代の学校教育制度の中で包摂されなかった子どもたちを救済するための暫定的な場であり、当初、国からは早期廃止を求められていた学校だったからである。

そんな「あってはならない」学校として始まった夜間中学は現在、「なくてはならない」学校として存在している。2016 年の教育機会確保法の成立で、夜間中学が法的に位置づけられ、文科省は各都道府県に 1 つは設置する方針を掲げた。

そこでは、これまで夜間中学への入学を認められていなかった「形式卒業者」も入学できるようになった。²⁾「形式卒業者」とは、「実質的に中学校段階までの教育を受けていないが、中学校卒業証書を得た人々を指すために夜間中学関係者が作り出した造語」³⁾である。「形式卒業者」は、冒頭で取り上げた「あってはならない」という言葉に最も当てはまる存在であり、義務教育の問題点を浮き彫りにする存在と言っても過言ではない。

松崎（1979）は、本稿で取り上げる F⁴⁾をはじめとする「形式卒業者」の訴えを「義務教育その

-
- 1) 公立中学校の二部授業という形で、夜に授業が受けられる夜間学級を設置したのが夜間中学の始まりである。「〇〇中学 2 部」や「〇〇中学夜間学級」が正式名称であるが、本稿ではそれらをまとめて「夜間中学」と表記する。
 - 2) 2014 年に「中学校夜間学級等に関する実態調査」を行った文部科学省は、翌年の 2015 年 7 月に「形式卒業者」の夜間中学への入学に関し「入学希望既卒者については、義務教育を受ける機会を実質的に確保する観点から、一定の要件の下、夜間中学での受け入れを可能とすることが適当である」と示し、「各夜間中学の収容能力に応じて、可能な限り受け入れに取り組まれるよう」促す方針を示した。
 - 3) 江口怜『戦後日本の夜間中学 周縁の義務教育史』東京大学出版、2022、p.ii
 - 4) 本稿では、F をはじめとする「形式卒業者」と全ての夜間中学生をアルファベットで表記する。

ものを告発している」と述べる。

F さんや S 君が投げかける「形式卒業者」の問題は、夜間中学への入学可否を通して、実は我が国の義務教育制度そのものを告発しているのである。

それは途中で長期欠席した者や中退した者でも、また「あいうえお」や「かけ算九・九」ができない者でも、とにかく満 15 歳になれば就学義務を完了したことになり、それとともに行政当局の責任を免除するという制度である。

形式卒業者はこれに対して、あくまでも実質的な内容を要求していたのである。卒業証書が全過程を習得したことを証明するのではなく、就学義務終了の年齢に達したことを証明するくらいのものでしかない。そんな義務教育の空洞化をついているのである。⁵⁾

松崎（1979）が述べるように、文字の読み書きや簡単な計算もできないにもかかわらず、中学の卒業証書を持っていることで、夜間中学に正式に入学することができない「形式卒業者」が多く存在した。それは、義務教育制度の根本的な問題点についているだけではなく、全ての人に開かれた学びの場を目指す夜間中学が「形式卒業者」は受け入れないという差別の再生産に加担してしまっていることを表している。

本稿では、「形式卒業者」が夜間中学に正式に入学できるようになった今だからこそ、50 年前にこの問題に対して声を上げた当事者 F⁶⁾の叫びを取り上げ、それが当時どういった波紋を呼んだのかということを明らかにしたい。

第 1 章 「形式卒業者」の夜間中学入学が認められるまで

第 1 節 「形式卒業者」とは

「形式卒業者」とは、中学校の卒業資格は有するものの、実質的に義務教育終了の学力が備わっていない状態にある者を指す。文科省は「形式卒業者」を、「入学希望既卒者」と表現し、「様々な事情からほとんど学校に通えず、実質的に十分な教育を受けられないまま学校の配慮等により中学校を卒業した者のうち、改めて中学校で学び直すことを希望する者」⁷⁾と記している。

「形式卒業者」の問題について、夜間中学関係者は長年文科省に訴え続けてきたが、その方針を巡っては常に平行線を辿っていた。例えば、文科省（当時、文部省）の考え方が浮き彫りになった、社会人学級の事例がある。

1973 年に「川崎に夜間中学を作る会」が市民により結成された。運動の結果、9 年後の 1982 年に西中原中学校に夜間中学が開設された。その時、川崎市教育委員会側は、公立夜間中学の教育対

5) 松崎運之介『夜間中学の歴史』東京都夜間中学校研究会資料室、1976 年 12 月 20 日、p.209

6) 本稿では、声をあげた当事者は、F をはじめ全てアルファベットで表記する。

7) 文部科学省初等中等教育局初等中等教育企画課長発 各都道府県教育委員会教育長・各指定都市教育委員会教育長宛通知「義務教育終了者が中学校夜間学級への再入学を希望した場合の対応に関する考え方について」（二七初初企第十五号、二〇一五年七月三〇日）

象はあくまでも義務教育未修了者と定め、夜間中学開設と同時に社会人学級を設けた。そこに「形式卒業者」を含む中学校の卒業資格をもつ希望者が集められたのだが、“学級”と名付けられた社会人学級の実態は、一人の専任講師が、週二回国語の授業を行うといったもので、公立の夜間中学とはかけ離れたものであった。⁸⁾運動側は「希望するすべての人に夜間中学での学習を保障する」ことを求めているにもかかわらず、教育委員会側は、義務教育と社会教育の二路線を敷くことで、形式卒業生を夜間中学に入学させる道を閉ざしたのである。

1961 年から 42 年間、夜間中学で教鞭をとってきた見城慶和は、当時の文部省の対応を以下のよう

「そうした子供たちが、『やっぱり勉強をしたい』と夜間中学への通学を望んでも、文科省はずっと、形式とはいえ卒業したのだからと、『税金を 2 回も使って中学に通うことはできない』と拒んできました。私自身、入学を希望する生徒を泣く泣く断ったことが何十回もあります。そのたびに、“いったい何のための学校なのか”と思いました」（見城さん）⁹⁾

1979 年に文部省に入省した前文部科学事務次官の前川喜平は、当時の文部省の対応を振り返り、以下のよう

文部省が何をしたかということ、夜間中学は中学を卒業できなかった人たちのものだから、卒業証書を受け取った人を夜間中学に入学させてはいけないという指導を行った。不登校や病気などで中学に通えなかった子どもたちを、政策的に夜間中学に入れなくしたのです。¹⁰⁾

文部省は「卒業証書はすべての生徒に渡す」といった指導を各教育委員会に行っていた。「義務教育に留年や除籍はあってはならない」という原則のもとで、不登校や病気、家庭の事情などで学校に行かないまま中学を卒業する「形式卒業者」が生まれたのである。

第 2 節 文科省が示した再入学許可の通知

既卒者の夜間中学への再入学を明確にしていなかった文科省が、2015 年に「義務教育修了者が中学校夜間学級への再入学を希望した場合の対応に関する考え方について（通知）」という「形式卒業者」の夜間中学入学を認める通達を出した。¹¹⁾通知は、以下の文言から始まる。

8) 『川崎夜間中学ニュース合本』（1982～1990 年）「川崎に夜間中学を作る会」1982 年 6 月 5 日付資料 No.2

9) 『女性セブン』2020 年 8 月 13 日号、集英社

https://www.news-postseven.com/archives/20200802_1582160.html/2

10) 『週刊アエラ』2017 年 10 月 30 日号、朝日新聞社、p.30

11) 1966 年に行政管理庁（現・総務省）が出した勧告（夜間中学早期廃止勧告）後、減少傾向をたどった夜間中学であったが、長年の運動の努力が実り、2014 年 4 月に、超党派の「夜間中学等義務教育拡充議員連盟」（会長・馳浩自民党衆院議員）が発足し、法整備への動きが加速した。そこで文科省も夜間中学を「貧困のセーフティーネット」と位置づけ、調査に乗り出した。それが 2015 年の通知につながったのである。

従来文部科学省では、義務教育諸学校に就学すべき年齢を超えた者の中学校への受入れについては、ホームページ等において「中学校を卒業していない場合は就学を許可して差し支えない」との考え方を示してきましたが、一度中学校を卒業した者が再入学を希望した場合の考え方については明確に示していなかったところです。¹²⁾

ここでは、「本来、社会で自立的に生きる基礎を培い、国家及び社会の形成者として必要とされる基本的な資質を養うといった義務教育の目的に照らせば、義務教育を受ける機会を全ての者に実質的に保障することが極めて重要」と述べられ、「中学校夜間学級等に関する実態調査」を行なった結果、多くの「形式卒業者」の存在が明らかになったことが説明されている。また、「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」の結果から、不登校児童生徒に対し、「学校復帰に向けた学校外での個人の努力を評価し学校における指導要録上出席扱いとすること」で、「学校に十分に通わないまま卒業する生徒が今後も生じてくる」という、卒業証書を渡されてしまった生徒に対する言及もある。続けて文科省ははっきりと以下のように述べる。

このような状況を踏まえると、入学希望既卒者については、義務教育を受ける機会を実質的に確保する観点から、一定の要件の下、夜間中学での受入れを可能とすることが適当であると考えられます。¹³⁾

文科省は、卒業証書をもらっていても夜間中学に再入学できるよう方針転換をした。そうして、「形式卒業者」はようやく夜間中学で正式に学べるようになったのである。

長年、この問題を訴え続けてきた元夜間中学教師の関本保孝は、週刊誌のインタビューで以下のように述べる。

「1980年代の後半から、何度も政府と交渉してきた結果です。昼間の中学校の卒業証書を持って夜間中学で学ぶことができれば、万が一夜間が肌に合わなかったり家庭の事情などで途中でドロップアウトしてしまったとしても、高校受験をする最低限の資格は得ている訳だから、また時間をおいて挑戦できる。これまでは、昼間の中学を除籍処分しなければ夜間に通うことができなかったのですから、大きな進歩といえます」（関本さん）¹⁴⁾

関本は、個々の事情で昼間の学校にほとんど行けなかったにもかかわらず、中学卒業を認められたことで夜間中学に通うことができなかった生徒だけではなく、夜間中学の学びが中途半端になってしまった生徒に対しても、新たな門戸が開けたことに対する希望を語っている。

12) 文部科学省初等中等教育局初等中等教育企画課長発 各都道府県教育委員会教育長・各指定都市教育委員会教育長宛通知「義務教育終了者が中学校夜間学級への再入学を希望した場合の対応に関する考え方について」（二七初初企第十五号、二〇一五年七月三〇日）

13) 同前

14) 『女性セブン』2020年8月13日号、集英社

第2章 「形式卒業者」の叫び

教育の機会を保障することと、実質的な学力を保障することは同義である。にもかかわらず、「形式卒業者」は学力をつけることなく、形式的に卒業証書を渡されてしまったことで夜間中学に正式に入学することができなかった存在である。今から約 50 年前に、自分の置かれた状況を社会に訴えかけ、「形式卒業者」の入学を認めない当時の文部省や夜間中学教師を鋭く糾弾した F という 20 歳の女性がいた。本章は F の生い立ちと、夜間中学に入学してからの変化を通して、当時の「形式卒業者」がどんな思いを抱えていたのかを明らかにする。

第1節 F の生い立ち

本節では、F が書いたビラ¹⁵⁾、第 17 回全国夜間中学研究大会での F のスピーチ原稿、新聞のインタビュー記事¹⁶⁾などから再構成した F の生い立ちをまとめる。

7 人兄弟の 3 番目に生まれた F は、北海道の貧しい家庭で育った。ジャガイモに米粒が混ざったものが主食で、幼少期から毎日海辺に出て、コンブとマキ拾いをした。栄養不足で弟は脳性麻痺になり、弱視の妹も病院へ連れて行ってもらえなかった。F 自身も幼い頃に患った肺炎が元で両耳の聴力が弱く、学校の授業の内容が聞き取れず、先生からの配慮もなかったという。

小学校に入学後も、家計を助けるために、学校にはほとんど行けず、中学に弁当を持っていったことも一度もなかった。中学の総授業数 729 日のうち、欠席は 373 日、早退は 20 日、遅刻（授業の最後の方に顔を出すだけの出席）81 日だったにも関わらず、卒業証書が出され、F の学歴は中学卒となった。

中学卒業後はコンブ拾い、畑仕事、農家の手伝い、パチンコ屋、ダム建設の飯場を流転し、家計を支えた。その後、家を飛び出した二人の姉に続いて家出し、未成年でバーで働いたが、そこで貧しい者同士が博打で金を奪い合う様子を見て、「ここにいたら私はだめになる」と思い直し、職安を通して石鹼会社社長宅のお手伝いになった。社長宅で、「中卒のくせに字も書けないの」と言われ、学のない自身を責める日々の中、新聞で夜間中学の記事を見つけた F は、ひらがなしか読めないなかで、記事に書き添えられた電話番号に連絡をした。

そこで F は、夜間中学増設のためにドキュメンタリー証言映画「夜間中学生」を携え、全国行脚していた元夜間中学生の運動家である高野雅夫に出会う。当時の様子を高野は以下のように振り返る。

彼女は夜間中学の新聞記事を見て僕の家電話を掛けてきた。国鉄亀戸駅で待ち合わせることにして迎えにいったら、一時間以上待っても現れない。一週間後、再び電話があって、初めて彼女の話聞くことができた。

15) 1970～1971 年に全国夜間中学研究大会や生徒会などで撒かれたビラ 4 種類。

16) 「朝日新聞」1971 年 1 月 4 日（朝刊）

これは後になって分かったことですが、彼女が最初に電話をかけてきたとき、夜間中学に入れてやるという名目でどこかに売り飛ばされるんじゃないかと、僕が来るのを駅の柱の陰にかくれてじっと見ていたらしい。¹⁷⁾

その後 F は、夜に勉強ができるようにぬいぐるみを作る町工場を夜間中学卒業生に世話してもらい、1970 年 4 月荒川九中学夜間学級に入学した。夜間中学入学後、F は 15 年計画を立てる。「夜間中学を出て看護師の資格をとり、村で働くために帰っていかう。家族のだんらんもない、教育も大切さも感じない、そんな故郷にしないために」¹⁸⁾。自身の半生が取り上げられた新聞記事の中で、F は明るい未来を信じ、希望を語っている。しかし、F はその後、夜間中学で孤立してしまう。次節から、F が全国夜間中学校研究大会で配ったピラを元に、当時の様子を振り返る。

第 2 節 F の叫び (1970 年)

第 1 項 第 17 回全国夜間中学校研究大会でのスピーチ

1970 年 11 月 20・21 日に行なわれた「第 17 回全国夜間中学校研究大会」で、F はピラを作成し¹⁹⁾、その内容を元にスピーチを行なった。

F が夜間中学入学後にどうして孤立していったのか、同じ夜間中学生同士の中でどのような考え方の相違があったのか、長文になるが以下より引用する。

生活に追われ、四才頃から、子守、コンプ拾い、農家、パチンコ屋、飯場の飯炊き、バーのホステスなど手取り早く金になり、学歴を必要としない仕事だから学について考えたことがなかった。

学とはなんだろう？

－空山、川などの簡単な字以外は新聞も読めないし九九もわからない足し算、引き算の計算は指や足であればできるが、 $34+23$ 式になると、前からやるのか、後ろからやるのか全然検討がつかなかった。

時計の見方や電話のかけ方など日常生活に必要な知識がなんにも分からず毎日苦しんだ。こんな私でも九年間の義務教育を受けたことになっているのです。卒業証書をくれた情け深い中学校があったんです。

今年の一月朝日新聞で－夜間中学－の存在を知った時心がパーツと明るくなったが、すぐ暗く悲しい気持（ママ）に変わり（ママ）今迄、有難いと思っていたはずの卒業証書が憎くたらし

17) 「産経新聞」2002 年 10 月 24 日（大阪夕刊・夕刊文化）

18) 「朝日新聞」1971 年 1 月 4 日（朝刊）

19) 神戸学院大学夜間中学資料室に所蔵している高野資料（高野雅夫より寄贈された資料）のなかにはほぼ同じ内容のピラが 2 種類ある。文中で引用したピラ 1 は、1970 年に行われた第 17 回全国夜間中学校研究大会で配られ、「私にだって学ぶ権利があるんだ」がタイトルのピラ 2 は、年明けに行われた日本教職員組合の全国集会（日教組全国教研）で配られたものである（ピラ 1 文中の「九ヶ月たった」がピラ 2 では「一年たった」に変更されている）。

く（ママ）なった。どうしても、文字や足し算、引き算を覚えたくて－卒業していない－と嘘をつき学校に入学したが嘘をついたのが辛くて、先生に本当のことを打ち明けた。

学校側では、－卒業者は規則として入学……させられない－なぜ？私は今迄学校で何も習っていない稼がなくちゃ食えなかったんで、学校を休んでばかりいた！－この学校では卒業している－と云ってほしくない！－あんた、そんなこと云うけど、前の学校の校長さんはあんたのためだと思って卒業証書を渡したんだよ－こんな言葉のやりとりをしながら、九ヶ月たった。

ある生徒から－バカなヤツ、今更騒ぐより、おとなしく、先生たちの云うことを聞いて勉強した方が自分のためなのに卒業していることがバレたら（ママ）、あんたばかりか他の人たちも来られなくなり夜間中学も廃止されるよ－と言われた時、とっても悲しく、やりきれぬ怒りが腹の底からこみあげてきた。

先生が云うのなら、まだしも、仲間が仲間である者を差別する！！許せない！

私もそうだが、人間はなぜ自分たちにとって不利な事や得にならない事だと目をつぶり口をつぐむのだ！今の夜間中学がそうだ！－なぜかくすのですか。法律がどうであれ、私たちは何も身につけていないんです。ただの紙切れを押しつけられただけなんです。それなのに、どうして本当のことを云ってはいけないんですか？－

あんたら、どんな悪いことしたの？なぜこそこそ隠れなければならないんだ！

何がこわいのよ。自分だけが勉強できれば良いのさ式に考えていたんじゃない形式卒業者はどうなるの！！あんたら、もう忘れたの学のないために受けた社会の白い眼や差別を！！お願い－思い起こして、あの時の怒りで泣き寝入りしている仲間のことを考えて！！

法律や国の仕組みがどうなっているのかむつかしくて分からないが－法律は私らに死ねと云ってるみたいだ。

－臭い、バカ、貧乏たかれ－などとののしられながら、学校に行きたくとも行けず夢中であがき必死に生きてきた。今ようやく－勉強したい－と思ったら、法律が目の前に立ちふさがり私の道をじゃまする。

もうがまんができない。

負けるもんか！！

過去に受けた差別を二度と許すもんか！！²⁰⁾

この後、F の生き立ちを綴った文章が続き、最後は大会関係者への質問文で締められる。

◎最後に文部省、厚生省、労働省教育委員会全国夜間中学の先生方に質問があります。

一、私のようなかけざんの九九もできないような人間でも中学卒業者だとみとめますか？

二、私たち形式卒業者をなぜ夜間中学校に入学させないんですか？

以上の質問を私に分かるように答えてください。²¹⁾

20) 『ルンプロ元年 抄』1975 年、修羅書房、p.806-807（文中に改行と改行一字下げは本文ママ）

F のスピーチを受けて、当時の文部省ははじめ夜間中学関係者がどのように対応したのは次項で述べる。

第2項 F の訴えに対して①

第17回全国夜間中学校研究会の大会記録集に文字起こしされた、F のスピーチのまとめと、当時のやりとりを引用する。²²⁾

○荒川九中 F

北海道の出身で中学校を卒業している。職安に行った時「あんたの学歴ではやれるような仕事はないよ」と言われてくやしかった。

朝日新聞で夜間中学の存在を知った時は、心が明るくなった。嘘をついて、夜間中学に入学した。あとで悪いと思って、先生に話した。「中学を卒業している人は夜間中学にはもう来られないんだ」と言われた。「前の学校の校長さんは、あんたのためを思って卒業証書を渡したのだ」とも言われた。いろいろと先生とやりとりをして、9カ月過ぎてしまった。友だちにまで「そんなことがばれると、夜間中学までつぶされるよ」と言われる。私のような一枚の卒業証書に泣く、形式卒業者を夜間中学へ入れてください。

文部省、厚生省、労働省のかたがた、夜間中学校の先生がたに質問したい。「私のようななかかけ九九のできない者を中学卒業者と認めますか」「私のような形式卒業者を夜間中学に入れてください。そして私のような形式卒業者を1人も作らないでください。」

この質問によく分かるように答えてください。

(文部省) なぜ、形式卒業者を出すのか、ということが、根本の問題であろう。指導要領、指導要録があつて、どれだけ進んだかをチェックすることになっているから、九々も知らない、文字も知らないのをほっておくのは、本来はあり得ないはずだ。今は落第をさせないのでそのまま卒業させてしまったものと思う。

(生徒司会者) 形式卒業者を、夜間中学に入学させることはどうか。

(文部省) 認定は、学校長にまかされている。一応、前の学校長が認定して、卒業させた者をもう一度中学に入れるのは原則としてできない。しかし、夜間中学はそうした人の学力をつけてやる場だから門戸を開いてよいと思う。

(荒川九中 塚原) そんな人は、全国に何万といえるはずだ、そんな簡単な立場では、夜間中学は爆発してしまう。

21) 別日に配られた「私にだって学ぶ権利があるんだ」がタイトルのビラ（ビラ2）の最後は「最後に日教組の先生、会場の皆さんに質問があります。私のようなかけざんの九九もできないような人間でも中学卒業者だととめますか？なぜ私のような人間に卒業証をわたしたのですか。」と締められている。（『ルンプロ元年 ざり』1975年、修羅書房、p.814-815）

22) 『第17回全国夜間中学校研究会 昭和45年11月20日（金）・21日（土）大会記録集』「5. 生徒の訴え」、1970年、p.24-26

(文部省) 社会教育機関との兼ね合いで、やれないだろうか。

(天王寺中 徳田) 今の文部省の発言はとてもいいみやげができた。天王寺にもよくそんな人が来る。大阪府、市の教育委員会及び他の設置府設置府県へも文部省から指導していただきたい。塚原さんの言うように爆発しそうになったら、どんどん夜間中学も作るよう文部省からも働きかけてほしい。

この時の文部省関係者は「形式卒業者」を、夜間中学に入学させることについて、「卒業させた者をもう一度中学に入れるのは原則としてできない。」と答えながらも「しかし、夜間中学はそうした人の学力をつけてやる場だから門戸を開いてよいと思う。」という意見を述べている。また、文部省関係者から得られた発言を、天王寺夜中の教員(徳田)は「いい土産」と表現している。

F の訴えに文部省関係者や一部の教員は肯定的な態度を示した。一方で F が通う荒川九中の教師である塚原は、「形式卒業者」の夜間中学入学に関しては、一貫して否定的であった。塚原の否定的な言動は次の日も続く。

第3項 F の訴えに対して②

以下より、翌日のテーマ別分科会でのやりとりを引用する。²³⁾

- ・司会者 正式会員ではないが、今、Fさんから発言を求められたので、昨日の発言者でもあり、特別に許可したい。
- ・F 昨日の私の二つの質問にはっきり分かるように答えていただきたい。
 - (1) 私のような形式卒業者を、なぜ夜間中学に入れてくれないのですか。
 - (2) かけざん九々も分からない者を、先生がたは中学校卒業者と認めますか。
- ・白井(天王寺中) 私も、形式卒業者のことで問題を抱えている。これはさかのぼってそういう卒業者を出したことが問題なのであるがー。生命を預かる。生きている者を預かっている現場の者として、申し合わせはできないかも知れないが、われわれの良識とか判断で解決していかなければならない。やはり受け入れるべきであろう。
- ・牧原(二葉中) Fさんの意見をここで話し合って、答を出してあげるべきだ。
- ・飯田(浦島中) そんなケースの子が来たら、「勉強したい」という人なら、喜んで認めている。
- ・塚原(荒川九中) それなら、Fは鶴見に行くか。ぼくは資格もない。学力もなんにもない人をまず救いたい。現場を預かるものとして、ぼくは受け入れられないよ。
- ・和泉(梶谷中) 梶谷の場合は、聴講生として受け入れている。力については問題もあろうが、元の北海道の学校でも、卒業の認定には学校としても、相当考慮したはずだと思う。あなたの将来を考えて証書を出したのだと思う。

23) 『第17回全国夜間中学校研究会 昭和45年11月20日(金)・21日(土)大会記録集』「2テーマ別分科会 1) 第1分科会(経営管理)」1970年、p.53-55

- ・中光（文部省） 形式的には、卒業したと認定せざるを得ない。
- ・K（荒川九中生徒） それでは、Fさんはきょうからどうすればいいんですか。
- ・塚原（荒川九中） 横浜へ行って入れてもらえばよい。
- ・F かけざんも九々もわからない者を、先生がたは中卒者と認めるのですか。
- ・司会者 形の上では、やはり卒業したと認めないわけにはいかないと思う。
- ・塚原（荒川九中） 権利をいう学校を選ばずに、やさしい善意のある学校を選べばいいではないか。
- ・飯田（浦島丘中） こんな席で、一人の子を危機に追い込むようなやり方は望ましくない。個人的なガイダンスの問題だ。
- ・塚原（荒川九中） それじゃ退場します。
- ・（荒川九中卒業生） 塚原先生の真意は別のところにあると思う。

塚原は、前日も文部省関係者が「形式卒業者」に「門戸を開いてもよい」と言った発言に対して「そんな人は、全国に何万というはずだ、そんな簡単な立場では、夜間中学は爆発してしまう。」と否定的な態度を示し、翌日も「ぼくは資格もない。学力もなんにもない人をまず救いたい。現場を預かるものとして、ぼくは受け入れられないよ。」とはっきりと「形式卒業者は受け入れない」という姿勢を示す。また、会の最後にはFを追い込むような発言を繰り返し、浦島丘中の教員（飯田）が「こんな席で、一人の子を危機に追い込むようなやり方は望ましくない。」とFを庇うという状況になる。しかし塚原は、その発言に対して、「それじゃ退場します」と返し、まるで喧嘩を売っているような雰囲気になっている。そこで、教え子（荒川九中卒業生）が最後に「塚原先生の真意は別のところにあると思う。」とフォローする形で会は終了した。

第4項 高野からの叱責

全国夜間中学校研究大会でFが訴えた「形式卒業者」に関する質問と要望に関して、教員も含めた夜間中学関係者はそれぞれに意見が分かれた。はっきりとした答えが得られなかったFは、荒川九中卒業生として会場にいた高野雅夫に問い詰められる。

高野雅夫（東京・荒川九中卒業生）

（荒川九中二部生、FとKに－） なんだよ、偉そうなこと言ったって食い下がれないじゃないか。あれでお前納得できたのかよ！

F（東京・荒川九中二部一年²⁴⁾） できないー

高野雅夫 じゃなんで言わないんだよ。

F ………

高野雅夫 お前はね、正式入学とかなんにも決ってないんだぞ、今の返事じゃ！

24) Kは荒川九中2部の3年の女生徒で、Fの先輩にあたる。

F そうですか？

高野雅夫 良く聞いてたら分つただろう。最後の方でグチャグチャって誤魔化されたんだよ。

F ジャ私正格（ママ）、正式入学じゃないっていうわけ？²⁵⁾

夜間中学の授業参観が18時から始まるため「この会は終わります」と司会が告げた後も、高野はじめ、生徒たちは「生徒が納得しない限り実行すべきだよ」と、会の継続を訴える。その中で、弱腰になっていたFやKに、高野は以下のように叱責する。

高野雅夫 君たちはさ、差別をうけてるくせに本当の差別がどんなものであるかって事を自身でやっぱり分っていないんだよ。分つたらね、これからねのめとさあんな授業なんかに出れるかよ。あんな教師の冗談じゃないよ！そんな……俺は、そんな、そんなヤツラのために夜間中学廃止反対や作ってんじゃないねえんだよ。（中略）……何が授業参観だよー冗談じゃねえよ、授業なんか一年中やってんだよ。お前らは今日しか発言する機会がないんだぞ。今日が一生のうちで最後かも知かんないんだぞ。区役所の前に出たら今から交通事故で死ぬかも知かんないじゃないか。ああ言っとけば良かったじゃ遅いんだよお前ーそうだろう。今言わなきゃいう時はないんだよ。今しかないんだぞ。明日来れないだろう仕事やってるからーちゃんと日当払ってくれるかよ先生たちがー普段はさ生徒を守るだとかカッコ良いこと言ってるんだけどね、いざとなったらね、生徒の発言をみんな封じていくんだよ。

F だからそれはね、私なんかもそれを今言われてね気がついたん。

高野雅夫 それが教師なんだぞ！

F 先生の機嫌とりになって先生の……

高野雅夫 何が先生にありがとうございますだ。給料貰って教えるのは当たり前じゃないか！

その後も高野の叱責は続き、FもKも無言のまま立ち尽くす形で、会は終了した。しかしFの訴えは、『「先生、責任とって」に沈黙」²⁶⁾という見出しで当時の読売新聞に取り上げられている。全国夜間中学校研究会を取材にきていた記者の目からも、切実なFの訴えは印象に残るものであったのだろう。

Fは、約1ヶ月後に行われた日本教職員組合の全国集会でも「私のような形式中卒を作るな」「九九も出来ないような中学卒業者をつくったやつは責任を取れ！」と手書きで書かれたゼッケンをつけてビラをまいた。²⁷⁾また、東京都豊島公会堂の市民に送る夕べの会場で荒川九中教諭の見城が夜間中学の報告をした際には、突然壇上に駆け上がり、「見城、ええ格好するな。格好の良いこと言うな」と叫びながら突進した。²⁸⁾

25) 『ルンプロ元年 ざり』1975年、修羅書房、p.809

26) 「読売新聞」1971年1月20日（朝刊）p.10

27) Fは成人式も同様のゼッケンをつけたジーパン姿で出席した。

28) 高野雅夫『夜間中学生 タカノマサオ 武器になる文字とコトバを』1993年、解放出版社、p.131

そして約1ヶ月後の2月10日に行われた生徒会では、高野も含めた夜間中学関係者に「夜間中学に差別を作ったのは誰だ!」というビラを突きつけている。

夜間中学のことを何ひとつ知らなかった私に、「夜間中学校に差別はない」
「夜間中学の生徒会は生徒が主役だ」ともっともらしい面をして喋った
塚原先生、高野さんはじめ先生
生徒の皆んな（ママ）は一人一人はしっかり答えてほしい!²⁹⁾

この時のFについて、高野は後に自著の中で「速く高く鋭く羽ばたいて行く姿」と表現し、「彼女のひたむきさに対応しなければいけない緊張感が怠惰になりがちな俺たちをどれだけ鍛え直してくれたかはかりしれない」³⁰⁾と綴っている。

第3節 Fの迷いと決意

1971年、荒川九中夜間学級の2年になったFは「出発」と題した作文を書いた。「目先の欲に目がくらみ、私は自分の行く真の道を間違えるところだった」と始まる作文に、これから始める“闘い”で家族や恋人を失うかもしれない不安と決意が綴られている。

闘いの途中に孤立し私は狂い死にしてしまうかもしれない。なぜなら私の愛する人達が闘うことに大反対なのだ。そのことで、私は迷い、寝むれぬ（ママ）日もあった。一番の打撃は「将来安定した生活を送りたいのなら、夜間中学や他の運動にかかわらずに勉強だけして欲しい。」「僕の家はお嫁さんになる人は普通の考えの娘を望んでいる」「テレビに出たんだね、又何か喋るのではないかと、ハラハラしたけど何も喋らなかったのでホ とした（ママ）」と愛する人に言われ、恋を知ってしまった自分がなさけなかった。だがこういうことで妥協してしまったのでは、いつまでたっても、世の中に差別はなくなる。差別は差別を知った人間が立ちあがらなくてはならないものなのだ、と言うことを私は私の先輩、高野雅夫さんの姿から学びとった。³¹⁾

恋人ができたFは、そのことで闘う決意が揺らいでしまっている自身を恥じている。恋人はFが表に出て「形式卒業者」として社会に訴えかけることを反対し、家族はFが学校で学ぶさえ否定的であった。北海道に帰った際に父親に言われたことをFは新聞のインタビューで以下のように語る。

帰郷した彼女に父はいった。「なんで今さら勉強が必要だ。口ばかり達者になって。今の世の

29) 「夜間中学に差別を作ったのは誰だ!」(1971年2月6日) Fが作った手書きのビラ

30) 高野雅夫『夜間中学生 タカノマサオ 武器になる文字とコトバを』1993年、解放出版社、p.121

31) 荒川九中夜間学級生活記録「こんばんは」No 41 (1971年6月29日発行)

中で勉強してサラリーマンになったところで、オッカアと子どもも養うのが精いっぱい、家など建つめえ。漁師なら働く息子の二人もいて半年漁をやり、半年出かせぎすれば一年で家が建つ。今の日本ほどありがたい国はねえ」。

こんな父は、弱視の妹にメガネを買う知恵も、病気の子どもをすぐ医者に見せる機転もない。それががまんがならない。「だから勉強が必要なんだ。」³²⁾

家族や恋人の反対があっても、F は学び、闘い続けることをやめない決意をする。「出発」と題された作文の最後には、「(注意) 私は自分のことを一番よく知っているので、闘うなどと大きな声では言えないが、『私の闘い』というのは自分が今持っている怒りをぜったいに忘れてはならない、ということです。」³³⁾と添えられている。

去年の大会では、会場で堂々とスピーチをしているように見えた F は、「闘う」ということさえも大きな声で言えない二十歳の女性であった。あの時 F は、自身を必死で鼓舞しながら訴えたのだろう。F にとって「怒りを忘れてはならない」ということが「闘い」なのであれば、F はこの時、「穏やかで幸せな人生」ではなく、怒り続けることを自らに課す人生を選択したということである。

第4節 F の叫び (1971 年)

第1項 第18回全国夜間中学校研究大会での壇上占拠

1971 年 11 月 26・27 日に大阪で行なわれた「第 18 回全国夜間中学校研究大会」で、F は怒りを「爆発」³⁴⁾させた。大会 1 日目の午後に行われた「日本語学級の現状報告」の際に、在韓日本人引揚者二世の生徒のスピーチが途中で遮られたことをきっかけに、F を含む「形式中卒、オール 1 の会」のゼッケンをつけた生徒たちが壇上を占拠した。会場にいた新星中学校夜間学級教諭の上田喜三郎が書いたその時の様子を引用する。

このあと夜間中学生近畿五校代表者による体験発表に移ったが、まず初めに、発表予定外の韓国引き上げの M 君（小松川第二中学）が登壇、たどたどしい日本語で、いまだに韓国にいて日本に引揚げできないでいる日本人に対する対策が求められていること、引揚げるために家族が離れ離れにならなければならない悲しみ、生活に慣れない上にことばが分からないことなどを訴え、引揚者への教育対策はどうなっているのか、文部省に回答を求めた。

この発言の途中、時間を気にした司会者が発言をやめるよう求めたため、会場中央にいた「形式卒業、オール 1 の会」³⁵⁾などのゼッケンをつけた生徒たちが演壇にかけ上がり一時占拠、そのなかで回答に立った中嶋章夫初中局中学校教育課長補佐は「東京都では夜間中学に日本語

32) 「朝日新聞」1971 年 1 月 4 日（朝刊）p.4

33) 荒川九中夜間学級生活記録「こんばんは」No 41（1971 年 6 月 29 日発行）

34) 高野雅夫『夜間中学生 タカノマサオ 武器になる文字とコトバを』1993 年、解放出版社、p.133

35) 正確には「形式中卒、オール 1 の会」である。

学級を開設しているが、文部省としては全国的に具体策を立てていきたい」と回答した。

続いて立った天王寺中学一年生の S 君は、「怒り」と題する体験発表を行った。九州の炭鉱の閉山で貧困のなかで小中学校を終えたが、中学校の卒業証書はもらったものの学力は小学校程度。彼は形式卒業者を生み出す教師たち、その入学を認めない教育行政担当者などを鋭く告発、それを支援する夜間中学生が壇上の彼をとりまいた。「俺たちは現在の教育体制のいけにえになった犠牲者なんだ」、形式卒業者に教育を受ける機会を与えよ、と文部省・大阪府市教育局関係者をきびしく追求、マイクをつきつけ回答を迫った。これに対し、文部省中島課長補佐は、「卒業証書をもっていても学習の機会を与えるべきであろうが、制度上入学はむずかしい」と回答、教委関係者も同様の回答を繰り返したため、その応答をめぐって会場は騒然となった。³⁶⁾

この時、その後に予定されていた天王寺中学、菅南中学の授業参観は中止されたが、F を含む「形式中卒、オール 1 の会」の訴えで、その後 9 人の生徒の体験発表が行われた。

また、二日目も「形式中卒、オール 1 の会」は形式卒業者の教育権を訴え、研究大会に参加していた文部省や教育委員会関係者を厳しく追求した。以下より、前出の上田（1972）がまとめたその時の様子を引用する。

まず東京都夜間中学校研究会調査研究部より、昭和四六年二月に文部省が実施した夜間中学実態調査の「中間集計」について分析と批判の報告があり、長欠生徒対策はどうなっているのか、文部省のこれからの夜間中学に対する方針などについて、文部省の姿勢を厳しく問いただしたが、これを機に数名の夜間中学生が発表者席に出てマイクをとり、第一日同様生徒による文部省・大阪府市教育局関係者、教師への追及の場となった。さらに続いて同じく東京都夜間中学校研究会指導研究部より「生徒指導についての諸問題」について、東京の抱えている問題が提起されたが、討議は生徒指導の問題に止まらず展開され、生徒や教師から「大阪には三〇〇〇人にのぼる中学長欠生徒がいる。東京では認められているのになぜ大阪で学齢生徒の夜間中学夜間入学を認めないのか。入学を認めるべきだ」という要求が出された。また、前日同様、形式卒業者を正式入学させるべきだとの要求が生徒より出され、形式卒業者を夜間中学に受け入れるのか、受け入れないのかに議論が集中、文部省・大阪府市教育局関係者へマイクを突きつけ激しく迫るなど、騒然としたなかで議論が続行された。

席上、文部省の中島課長補佐は「法的には学齢生徒や形式卒業者の入学は認められないが、形式卒業者については、実情に沿って入学の機会を与えるよう努力したい」と答えた。また、大阪府でも今後学齢生徒の受け入れについて考慮していく意向が示されたが、発表者席に立った生徒たちは、出席の来賓教師の一人一人にマイクを付けて、形式卒業者の入学を認める確認を求めるなど、会場は生徒から来賓・教師へ厳しい言葉、激しい言葉が飛ぶなど、追及の場と

36) 上田喜三郎『教育』273号、「夜間中学全国大会と今後の課題」1972年、p.126-128

なった。結局、学齢生徒、形式卒業者の入学、引揚者対策について議論が集中、予定時間を大きく過ぎた午後三時半、新役員選出、大会宣言採択を終えて、波乱に満ちた大会は終了した。³⁷⁾

「会場は生徒から来賓・教師へ厳しい言葉、激しい言葉が飛ぶなど、追及の場となった。」とあるが、会場でのやりとりを文字起こししたのものには、「てめえら、劇やってんじゃねえよ」という野次や、F の訴えに対して生徒が「私たちがそんなことを考える必要がないのよ」³⁸⁾と夜間中学生同士の意見の違いもみられた。

F にとっては、教師らとの激しい対立があったことで（中には天王寺夜中の岩井好子など、F に寄り添う意見の教師もいたが、怒り心頭の F にその声はしっかりと届いていなかった）、夜間中学教師に、より不信感と怒りが増した結果になった。

第2項 「教師は、立場をはっきりしろ！」

大会の1ヶ月半後に、F は「教師は、立場をはっきりしろ！」と題された新たなビラを作った。F の心情が丁寧に綴られた内容のため、長文になるが全文を前半と後半にかけて引用する。³⁹⁾

教師は、立場をはっきりしろ！

私たちオール1の形式中卒は、自分たちが受けてきた差別を、全国夜間中学大会や日教組、全国教権などいろんな形で主張してまる二年たったが、現実はどうなっているのだ！！

私の場合、出身校のH中学校（北海道）では〈この卒業生のAさんはオール1の形式卒業だと東京でさわいでいるけど、先生方は決してあの生徒がにくくて勉強を教えなかったわけではない。だからみんなは、ああいう生徒にならないようにしっかり勉強してほしい〉と全生徒の前で校長が発言したため同校二年の私の弟は〈姉ちゃんのばか！俺は片身が狭くて学校に行けない〉親類の子供たちは〈恥かしくて学校に行けない〉と泣きつかれ、びっくりしてしまった。北海道の先生はこういう事実を知っているのか！これが私の血の叫びに対する教師の姿勢だったのか！

強度の弱視の妹を心配した私は昭和四十五年の三月と十月の二回にわたり、東京から妹の在学するK小学校⁴⁰⁾を訪ね、妹の担任に会い家庭の事情を話し、妹の目のことを頼み、安心して東京にもどったが妹に先生がしてくれたことは、「Rさんは強度の弱視です。専門のお医者さんに診察してもらってください」と母あてに手紙を書いただけだった。無学で、無知の親には先生のそういう手紙が理解できないからこそ、私ははるばる東京から北海道まで行ったのに！なぜ私が必死にこういう叫びをあげるのかー私自身三歳の頃に急情肺炎が元で両耳の聴力を失

37) 同上

38) 『ルンプロ元年 ざり』1975年、修羅書房、p.961

39) 氏名は、筆者がイニシャルに変更した。

40) 学校名は、筆者が仮名にした。

った。母は入学式にそういう私の身体の欠陥を学校側に届けたのに、耳の聞こえぬ（ママ）、私を受け持った教師たちは、誰れ一人として先生の声が聞える（ママ）ように前の席に座らせるとかいったような気の配りようはしてくれなかった。耳の聞こえない私は言葉を知ることができなかった。だから、先生に〈ばか！白痴〉とののしられ分厚い本で頭をバッシンバッシンとぶんなられても「痛い」という言葉すら知らず、ただただ動物のように下向き「ウ！　ウ！」と声を押し殺して泣くことしか出来なかった。七才から十五才の義務教育を私はこのようにしてしか受けてこなかった。耳は飯場の飯炊き時代に自力で治した。夜間中学で、言葉と文字を奪い返し、自分が受けた義務教育ってなんだろうと考えた。考えた結論が現在の私の行動だ。行動しているうちに、私はいろんなことを知った。例えば、私のように目に見えない身心障害児、は現在の義務教育の中でどんどん切りすてられている。私が自分の学校生活をえんえんと語ったのは－私と同じようなケースの生徒を、妹を私と同じ形式中卒にしたいからなのだ！過去に K 小学校の特別学級を作るための材料にされた第十八才（弟の F 学園の認知を六年間も握りつぶしていた－現在、同学園入園中）の例や自分自身の体験を通して、さげばずにはいられないのだ。

現在私の学んでいる夜間中学は一般的に差別がないと言われて－マスコミなんかではここにこそ真実の教育があるなんてかいてあるけど、そんなものはまったくうそっぱちで現実には大阪の T 中学で社会（K 教師）の授業のもつれから、在日朝鮮人のお母さん（H・S）が日本人男子生徒（H・T）からいすでぶんなぐられ入院するという事件がおこったが教師はぶんなぐった生徒に賠償金を払わせ退学させるという方法で自分たちの責任をいんべいした。進学中心教育の中で、数名の生徒を平気で切り捨てている事実もある。

『憲法 26 条や教育基本法で裁かれなければならないのはどこのどいつだ！？』

A 中の Y さんはその犠牲者の一人で、今、通信教育で苦学している。R 中の H さんは、盛岡出身の二〇才で九九も知らないオール 1 の形式中卒だが、去年の中間に行方不明－夜間中学で、十年前に二名も自殺者を出していながら、いま、また 10 年後に H さんみたいな可能性を持った生徒を出している事実が、証明しているように、問題は何も解決されていない。夜間中学の偽善者的教師は、全国夜間中学大会や、日教組大会で、こういう成果が上がりました……と上がった成果の報告ばかりしているけど問題は上がった成果ではない！Y さんのように切り捨てられてしまった生徒、H さんのように行方不明の生徒を出したことなのだ！

ビラは 2 枚に分かれ、前半と後半で内容が少し異なる。前半は前述した通り、F の幼少期時代からの教師への不信感が綴られ、仲間の状況を憂うものであった。後半は、全国の若者の犯罪事例を次々と出し（差別に苦しんで犯罪を犯してしまった事例が中心）、その元凶は教師の無責任さにあると、訴えかける内容になっている。

未熟児にガソリンをかけて焼いた 19 歳の少女。愛人の妻を刺殺し放火。クラブ、ホステス A 21 歳－沖縄生まれをばかにされて相手を刺殺した T 23 歳。応援演説をやめたくて、

箱根の女子中学生殺し中学三年生十五才を出した D 中学校－山形の園児殺し、ばかといわれ、中学一年生（十二才）－少年院に入りたくて中学生－学校放火、B 中学校などのほか、盗み、ひったくり、タクシー強盗、シンナーで死ぬ－というような事件が各地でぞくぞく発生しているが、北海道の先生、川崎の先生、夜間中学の先生、そして全国から集った先生に私は聞きたい。一年間、何をなされたか？！

現実には弟が弾圧され－妹は切り捨てられ－一方では川崎のような殺人事件、夜間中学生の暴力事件など、差別された現実は何一つ解決しないで、こんな全国教研なんかやっても意味がないぞ！！ おまえさんら教師はそういうことを解決するためにわざわざ全国から集ってきたんだろう？

教育というのは、俺たちのように一番切り捨てられている生徒の側に立ってこそ、初めて教育と云えるのだぞ！！

それなのにお前ら教師は、俺たち生徒側に立ってるふりをして「全国教研」を開き、〈あんなるほど、俺たちのことを云ってくれてるんだなあ！〉と俺たちや、俺たちの親兄妹を思わせ、20 年間もだまぐらかしつづけてな！！ もうだまされないぞ、人の代弁なんかするな！！

代弁するんだったら、俺たちにしゃべらせろ！！ 教師達は生徒と管理者「校長、教育委員会、文部省」の間をうろちょろ、うろちょろしているけれど、俺たちのじゃまするな！！ それよりもお前さんがた教師は、俺たち生徒の側へくるのか管理者の方へ行くか自らの立場をはっきりさせろ！ てめえの立場もはっきりさせないで何が教育だ！！ 何が民主主義だ！ ふざけるんじゃないぞ！！ とにかくおまえたち、教師はどっち側に立つのか今すぐはっきりさせろ！！ 立場をはっきりさせろ！！ 立場をはっきりさせない限り、俺たち生徒との連携も組めないし対話も生まれない！ 問題も何 1 つ解決しない！

“連続射殺魔” 永山則夫を見ろ！！ 七百六拾五日目も出席しなければならないのに、四百九拾八日も休んでいる！ そのオール 1 の形式中学卒が集団就職で上京し、つぎつぎと殺人事件を犯した。そのように追い込んでいながら青森の I 中学で彼の担任だった『S』は一体何をしたか？！ 証人として法廷に来て、ただくっちゃべって帰っただけじゃないか？？ 青森の先生。おまえさん方はそういうことをてっていきに総括して取り組まないかぎり第二、第三の永山則夫が続々出てくる。

青森だけじゃなく、他の先生方もそういうことを思い知ってかえれ！！

◎教師自ら作った“連続射殺魔” 永山則夫を見殺しにするのか！！

◎獄中の永山則夫と共に闘え！！

「形式中卒オール 1 の会」昭和 47 年 1 月 16 日

今までのビラには「形式卒業者」に関する質問が添えられていたが、今回は夜間中学の教師を糾弾する内容が中心になっている。第 18 回全国夜間中学研究大会での教師たちとのやりとりが、F の怒りを加速させたのだろう。

大会から約 2 ヶ月半後の 2 月 10 日と 2 月 12 日に荒川九中で行われた生徒会と自主討論会でも、

F は「形式卒業者」を差別する夜間中学と、管理者（校長、教育委員会、文部省）と生徒の間の中途半端な立ち位置にいる教師を強く批判した。

しかし、そこで F は教師の見城や塚原に「授業を妨害するために来ている」と決め付けられ⁴¹⁾、大会だけではなく、学校でも完全に孤立する。そうして、深い絶望を感じた F は自殺を決意する。

第 5 節 自殺を決意した F

高野資料⁴²⁾の中の F 関係資料を時系列に整理し、F に大きな変化があった 1970～72 年を中心に表にまとめた。

年月日	時間	Fの年齢	種類	内容（出来事）
1970. 11		20 歳	ビラ (1 枚)	第 17 回全国夜間中学校研究大会で配ったビラ 内容：自身の過去と家族の健康状態。九九ができない人を中学卒業者と認めてもいいのか？なぜ「形式卒業者」は夜間中学に入学することができないのか？ という質問で締められている。当日、大会に参加している文部省、教育委員会、教員に配られた。
1971. 1			ビラ (1 枚)	日本教職員組合の全国集会で配ったビラ 内容：自身の過去と家族の健康状態。九九ができない人を中学卒業者と認めてもいいのか？なぜ「形式卒業者」は夜間中学に入学することができないのか？ という質問で締められている。当日、集会に来ていた参加者に配られた。
1971. 2. 10		21 歳	ビラ (1 枚)	生徒会で配ったビラ 内容：「夜間中学に差別を作ったのは誰だ！」夜間中学には差別がないと言われているが、本当は差別が存在している。高野も含めた夜間中学関係者に向けて配られた。
1971. 6.			作文 (1 枚)	荒川九中夜間学級生活記録「こんばんは」に寄せられた作文 内容：恋人や家族の反対で迷いや葛藤を抱えながらも、「形式卒業者」の正式入学を認めさせる運動をや続けると決意表明した「出発」と名付けられた作文。
1971. 9. 1			手紙 (便箋 2 枚)	高野への手紙 内容：半年間の自責の念が綴られている。
1972. 1. 16			ビラ (2 枚)	生徒会・自主討論会で配ったビラ（？） 内容：「教師は立場をはっきりしろ！」夜間中学には差別がないと言われているが、本当は差別が存在している。その中で自殺した生徒や行方不明になった生徒。また、十分な教育が受けられずに犯罪に走った若者の事例などが取り上げられている。主に夜間中学の教師を批判する内容。
1972. 2. 10		22 歳	出来事	生徒会（味方である高野不在の中、F を追い詰める何かが起こった）
1972. 2. 12			出来事	自主討論会（味方である高野不在の中、F を追い詰める何かが起こった）
1972. 2. 13	午前 2 時 10 分		手紙 (便箋 3 枚)	見城先生、塚原先生への手紙（遺書？） 内容：二人の教師に生徒を死に追いやった責任を訴えかける内容。人を殺して永山則夫を裏切りたくないから、自分自身が死ぬことにするといったことが綴られている。
1972. 2. 13	午前 2 時 30 分		手紙 (便箋 2 枚)	日下田先生、須田先生への手紙（遺書？） 内容：日下部先生への文面→見城や塚原を殺す気持ちを抑えることができないから、自分自身が死のうと思うが本当は死にたくない。見城や塚原は私を「授業を妨害するために来ている」と決め付けている。殺してしまうと永山則夫を裏切るになってしまう。須田先生への文面→M くんは自分の二の舞いを踏ませないで。高野さんを理解して欲しい。もし生まれ変わることができたら、中国（共産党主義国）に生まれたい。自分のことを「死に損ない」と表現。
1972. 2. 13	午後 1 時		手紙 (便箋 3 枚)	高野への手紙 内容：自殺を考えたが、高野からの電話で「死んでいられない」と思った。見城や塚原を殺したいという気持ちを抑えることができないが、それは高野さんや永山君を裏切ることになってしまう。死を決意させた 2 月 10 日の生徒会と 2 月 12 日の自主討論会のテープを聞いてほしいという内容。
1972. 2. 21	午後 3 時 30 分		手紙 (メモ 2 枚)	高野への手紙と現金書留 内容：鶯谷の郵便局から、北海道までの切符を買った残りのお金（7 千円）を送る。今夜東京を出て津軽海峡で死ぬ。自分が死んでも高野さん、永山君、M 君、S 君、Y さんは頑張ってほしい。永山君、死ぬ私を許してほしいという内容。

41) 1972 年 2 月 13 日に F が夜間中学教師の日下部と須田に向けて書いた手紙の内容による。

42) 神戸学院大学夜間中学資料室に所蔵している高野雅夫より寄贈された資料。

1972. 2. 22	午後 2 時	手紙 (便箋 1 枚)	見城先生への手紙 (?) 内容:「見城にもひとこと」から始まる。見城の安っぽい思想がそれほどの人を苦しめたか、貧乏人の代弁をするな、自分を導こうとするな、自分を利用した責任を考へろ、自分の生きた 30 年を総括するべき、高野さんを見習ったかどうかという内容。
1972. 2. 22	午後 2 時	遺書 (便箋 2 枚)	高野への手紙 内容:永山則夫を裏切って自殺する私を許してほしい。自分の貯金やミシンはプロレタリア犯罪者解放のために使って欲しい。自分の墓は作らないでほしい。津軽海峡に眠らせてほしい。自分の家族に自分が生きた 2 年を伝えてほしい。貧しさの連鎖を断ち切るために立ち上がり、一番最低の道をとることを許してほしいという内容。

F が作成したビラの内容を時系列に整理すると、対象が変化していることが読み取れる。最初は「形式卒業者」の存在を社会に訴えかけ、文部省をはじめとした仕組みを作っている関係者を問いを投げかける内容のビラは、その後夜間中学内の差別を訴えかけるものになり、最終的に夜間中学の教師を強く批判する内容に変化している。

前述した通り、F は 1972 年 2 月 10 日の生徒会と、12 日の自主討論会后、荒川九中内で完全に孤立してしまう。F は、自主討論会直後の夜中に「見城や塚原を殺したいが、殺すことで永山則夫を裏切ることになるから自殺を決意した」⁴³⁾と手紙に綴る。その後、高野からの電話で一時踏み留まるが、約一週間後の 2 月 21 日に津軽の海に飛び込むために電車の切符を購入し、残りの金を高野に現金書留で送り、翌日 (22 日) に遺書を書く。

それまでも F は、「死にたい」という発言を繰り返してきた⁴⁴⁾が、実際に高野に遺書を書き送り、生まれ育った北海道の海に飛び込むにまで至ったのはこの時が初めてである。幸い自殺は未遂に終わったものの、F はその後同級生などから「『死ぬ気もないくせに海に飛び込んだりして、あれはお芝居』という言葉仲間から浴びせかけられ」、⁴⁵⁾荒川九中から別の夜間中学へ移り、高野からの連絡にもほとんど応じなくなった。

第 3 章 波紋を投じた「形式卒業者」

1970 年から始まった F の訴えがマスコミなどにも取り上げられ波紋が広がったことで、夜間中学関係者の中でも「形式卒業者」についての意見が分かれた。その中で、F が通っていた荒川九中の校長や塚原は大会の場で F を追い詰めるような発言を繰り返す。

本章では、第 18 回全国夜間中学研究大会における荒川九中の校長と塚原の発言を元に、一人の生徒がそこまで追い詰められたのはなぜか、そこにあった夜間中学のジレンマと、“理想的な当事者”ではなかった F の存在について考察する。

第 1 節 校長への波紋

前述したように、第 18 回全国夜間中学研究大会の壇上占拠で、F を中心とした「形式中卒、

43) 1972 年 2 月 13 日に F が荒川九中の塚原と見城に向けて書いた手紙の内容をまとめた。

44) 第 18 回全国夜間中学研究大会の壇上占拠の前にも、岩井好子に「死にたい」と訴えながらも、説得を受けて参加したという証言がある。

45) 「産経新聞」2002 年 10 月 24 日 (大阪夕刊・夕刊文化)

オール1の会」は夜間中学関係者に対して「形式卒業者」の夜間中学の入学を認めるか否かを糾弾した。その中で、Fが荒川九中の清輔校長に「形式卒業者」であることを隠すように指示されたことを訴える場面があった。その時清輔は、どう対応したのか。以下より、当時のやりとりのテープ起こしを引用する。⁴⁶⁾

F 荒川九中の校長のようにね。なにも喋れない生徒をね、精神的にね、形式卒業者だと名乗り出てはいけない、あんたは勉強してるから、それでいいではないかと弾圧してくるんですよ。それから、先生の中には1人1人みるとね、良い先生もいますよ。はいと受けるでしょう。卒業証書持ってないってウソついて後からとどけてあんたは認めてやるからっていう先生とね。全くあダメですね。うちの校長の指導は形式卒業者は認めないようになってますからって断るんですよ。そこのところははっきりしてもらわないとー私は荒川九中の校長にたびたび言われました。あんた、それでいいよねって……だから先生方がね、ここで黙ってるのは、校長先生に伺いたいですけどね、先生方に私らに対するようにね、先生方にもね、色んな形でね、精神的な弾圧加えているんですか？〈中略〉

清輔校長（東京、荒川九中） 荒川九中の校長の清輔と申します。今Fさんから色々話がありましたが、私もその点についてちょっと申し上げてみたいと思います。44年だと思いますが、区の主催で八ヶ岳のキャンプがありまして、そこに私も一緒に行ったんですが、その時F君と話したんです。え、校長先生も私たちと一緒にキャンプなんかに来て、ゴハンなんか一緒に食べるんですか。校長先生を非常に身近に感じたなんて言って……。

ここで清輔は、Fの質問にはすぐに答えずに、キャンプの事例を出し、Fとの関係は良好であったことをアピールする。その後、忙しくてFとは関われなかった話になり、Fが「形式卒業者」であることを知りつつも入学させたことを認める（下記、筆者による下線部）。

清輔校長 形式卒業者をどうするかという問題。〈中略〉実はその話をF君とよく話し合っておりません。あれこれ二部は夜ということもありまして、これは申し訳ないと思っております。それから形式卒業者をどうするかということですが最初入ってくる時には北海道の方なんですけど、この人は、卒業していないと、それは大変だと、じゃあ入学させましょうということで入ったわけです。今二年生ですね。

F そうです。卒業しましたと言いました。それで入れてくれました。

清輔校長 そうですね。それで今後、そういう人をどうするかということですが、ケースバイケースとさっき中嶋先生がおっしゃいましたが、本当にそうだろうと思うんです。卒業されて定時制高校に行きたいという人と、本当によくわからないんだ、もう一度中学の勉強したいんだという人とあるわけです。本当に勉強が必要だと思った場合、事情を書いたものを教育委

46) 高野雅夫『ルンプロ元年 ざり』1975年、修羅書房、p.977-978

員会に出して入学させるとこういう事になっているわけで、したがって、F 君の場合は入学しているわけです。正式入学しているわけです。

ここで清輔は、どういうわけか中学の卒業証書を持っていた F が「正式入学している」と発言する（上記、筆者による二重下線部）。それに対して、F は卒業証書を持っていないことを前提に入学したことを確認するが（下記、筆者による下線部）、清輔は F の出席日数の話に話題をすり替える。

F それはあくまで、卒業証書を持っていないという前提ですね。持ってったって、私は入学してます。

清輔校長 そういうことで今勉強してもらっているわけです。それからこれは私の方の希望ですが、色々やっているんですが、働いていて生活が大変だという事はわかるんですが、学校側の希望を言いますとなるべく出席してもらいたい。

思うように出席できませんと、先生方が家庭訪問、職場訪問したりしてどうしているかなという事になりますわけですが、本人にはいろいろ事情がある訳ですが、これは私の方の願いなんです、なるべく出席をすると、以上、F 君のことにに関して、ああ、もう一つありました。私が圧迫してるというか今までの F 君の話から聞こえたんですが、これは実に心外で、そういう気持は毛頭ないわけで、それは皆様の前で断言できます。

その後、清輔は圧迫の事実はないと保身にまわり、F に形式卒業者であることを隠すように言ったことを否定する。

F ただいま校長先生から、そのような話が出ましたけどね〈中略〉そのことに対してなぜ貴方は形式卒業者だと名乗り出てはいけないうって私に言ったんですか？ そんな親切な素晴らしい心を持っていながら……そんなやさしい顔してね。

清輔校長 え二人の（ママ）話を皆さんの前ですると良いんですが、私は形式卒業者を入れないと言った覚えは一度もない。

F あります。なんでそんなウソを……

清輔校長 どこで言いましたか？ どこで言いましたか？

F あのそれはね。就職の、教育委員会の、学校の給職作業員のこと…

高野雅夫（東京、荒川九中生） おい、ちょっと待って言ったか言わないか、とか。そういうことが今問題じゃないんだよ。

ここでも清輔は、「なぜ貴方は形式卒業者だと名乗り出てはいけないうって私に言ったんですか？」という F の質問に対して、「私は形式卒業者を入れないと言った覚えは一度もない。」と議論をすり替えている。つまり、F に「形式卒業者」であることを隠すように指示したことに話が及ぶと、

議論が噛み合わなくなっている。

おそらく清輔は、F が「形式卒業者」であるという認識を持ちながら、F の入学を認めたのだろう。中学を卒業していることを隠すように促したかどうかはここでは実証できないが、F が最初から自分が「形式卒業者」であることを表明していたことは、最初のやりとりの中で証明されている。そこで入学が認められたことで、F は「中学の卒業証書を持っていることは隠さなければならない」というメタ・メッセージを受け取った。そうして F は罪悪感を抱きながら、夜間中学に入学したのである。F の訴えには、抑圧されてきた自分が罪悪感を伴う嘘をつかなければならないという、更なる抑圧状況を招いた夜間中学に対する疑問も含まれている。

清輔は校長として、F の入学を善意で許可したのかもしれない。しかし、公に「形式卒業者」を夜間中学で受け入れるということになると、昼の義務教育の空洞化を認めることになる。F をはじめとする「形式卒業者」たちが本質的な問題提起を行い、義務教育の根幹を揺るがす行動に出ると、管理職という立場上、校長は学校を守らなければいけない。F が突きつけた義務教育の現実と受け皿としての夜間中学の役割の間で、清輔もまた大きなジレンマを抱えていたのだろう。「形式卒業者」は、義務教育に関わる学校関係者にとっては厄介な存在だったのである。

第2節 教師への波紋

次に、F が通っていた荒川九中二部の教師である塚原について言及する。前章で取り上げたように、第18回全国夜間中学研究大会の壇上占拠で、塚原と F をはじめとする「形式中卒、オール1の会」の間には深い溝が生まれた。

江口怜(2022)は、「生徒の代弁者」⁴⁷⁾として振る舞いを認める塚原にとっての教師と生徒の関係を「保護主義的な関係の中で生徒の当事者性を収奪してしまう危険性を孕んでいたともいえる」⁴⁸⁾と指摘しながらも、その他の場面での生徒の現実に寄り添う塚原の発言をいくつか抽出⁴⁹⁾し、「こうした叙述からは、塚原が生徒との関係において、単純な代弁者として振舞おうとしていたわけではないことがわかる。ここに見られるのは、生徒の他者性の尊重ともいえる姿勢である」⁵⁰⁾とし、その姿勢は「夜間中学における教師と生徒の関係を考える時に、極めて重要な実践的提起」⁵¹⁾であると評価している。

確かに塚原は、「他者性を重んじる」という綺麗事ではない独自の寄り添い方で教え子(夜間中学生)に接してきたのだろう。

一方で、そんな塚原に切り捨てられた存在が「形式卒業者」である F だった。前述したように、

47) 高野雅夫『ルンプロ元年 ざり』修羅書房、1975年、p.982

48) 江口怜『戦後日本の夜間中学：周縁の義務教育史』東京大学出版会、2022年、p.191

49) 文部官僚に対して「生徒たちの苦しみや真意は、福祉事務所の人なんかにはわからないのだ。われわれ教師にだってよくわかっているとはいえない。」と生徒たちの辛さを訴える発言(前掲『第17回全国夜間中学校研究会 昭和45年11月20日(金)・21日(土)大会記録集』p.12)や、塚原が著作の中で、生徒にとって「口をきかないということ、うそをつくこと」(『私は口をきかない』田畑書店、1979年、p.226)が人間が生きていく手段であるということを述べる部分を抽出。

50) 同上、p.192

51) 同上、p.192

第 17 回全国夜間中学研究大会で塚原は「形式卒業者」を認めない姿勢を貫き、翌年の同大会では F 等の壇上占拠後も序盤は一切発言せず、その理由を以下のように述べる。

僕はね、正直に言って自分の学校の子供が出て来たら、言えなかったんです。そんな事は、去年おこられたから、去年の大会でそんなのは内部でやれって言われたから⁵²⁾

つまり、本来は生徒のために存在する夜間中学の研究大会で、教師が代弁するのではなく、生徒自身が訴えたことに対して“お叱り”を受け、その矛盾を指摘するどころか受け入れた上で、翌年の発言も渋っていたということである。

そもそも塚原は、「形式卒業者」に対してここまで否定的かつ消極的な考えの持ち主だったのだろうか。第 17 回全国夜間中学研究大会の一年前の 1969 年に出版した自著の中で、塚原は形式卒業について以下のように述べている。

年間何百も欠席すれば、実質的には学習していないと同じである。文字も満足に読めず書けず、計算も出来ない、という中学卒業生が、何人も夜間中学校に入学を希望するという現実を、卒業を認めた校長は、どう思っているのか。生きる希望さえ奪うことがあるのだ。⁵³⁾

これには「恩情も仇の形式卒業」という皮肉めいた小題が付けられているものの、「形式卒業者」を責める内容ではなく、卒業を認めた校長に対する言及になっている。そして最後に、その判断が「生きる希望さえ奪うことがあるのだ。」と締め括られている。

ところがその 2 年後、大会中に何度も「死のうと思った」⁵⁴⁾と訴える「生きる希望さえ奪」⁵⁵⁾われた F に、塚原は以下のような発言をしている。

僕はね、子供に一生懸命（ママ）になって教えたけれども教えた中で、このくらいしかできなかったって事は、僕等の責任だよ。これは、だから F に聞いてくれるより、俺たちに聞いて欲しかった。という事は俺達は一切、どういう事をしたらいいのかっていいなかった訳、だから、かわりに F に言われたって事は俺は残念なの、なぜならば俺は F はあんまり好きじゃないけれどもね、個人的にはね、でもね、言いたい事とかなんとかって事はよく判る訳だけれども、完全に判ったなんて、そんな事は言わないよ。俺にも判る訳ないんだから、本当のところは。⁵⁶⁾

ここで塚原は F のことを「あんまり好きじゃないけれどもね」と言い放つ。F に対してではな

52) 高野雅夫『ルンプロ元年 ざり』修羅書房、1975 年、p.960

53) 塚原雄太『夜間中学 疎外された「義務教育」』社会新報、1969 年、p.259

54) 高野雅夫『ルンプロ元年 ざり』修羅書房、1975 年、p.972

55) 塚原雄太『夜間中学 疎外された「義務教育」』社会新報、1969 年、p.259

56) 高野雅夫『ルンプロ元年 ざり』修羅書房、1975 年、p.962

く、会場全体に向けた自身の無力さを憂う一人語りの中で、それはサラリと述べられている。ここにあるのは江口（2022）が述べた「他者性の尊重」⁵⁷⁾ではなく、個人の好き嫌いではないだろうか。塚原は「形式卒業者」ではなく、主張する「形式卒業者」に否定的であり、F そのものを認めたくなかったのである。

第3節 現実的な当事者

F は、夜間中学の教師や運動家たちにとっての“理想的な当事者”ではなかった。

例えば、マイノリティの支援活動をしていく中で、マイノリティ本人が「意識化」⁵⁸⁾し、自らの権利を主張することを喜ぶ支援者は多いが、支援者が持っている権力に気付くことは“理想的”ではない。支援者の立場からすると、暴走した当事者は守るべき者ではなく、面倒で煩わしい者であり、時には脅威的な存在にもなりうる。

F は、リベラルな教師が理想とする当事者の枠を超えて自分たちがコントロールできない存在になってしまった。それは、教師達に理想ではなく現実を突きつけたからである。高野が「速く高く鋭く羽ばたいて行く姿」⁵⁹⁾と表現した F の変化を、飛躍と捉えるか、生意気だと捉えるかは、“北海道から出てきた 20 歳の女性”という属性を持つ F を元々どう見ていたのかによって分かれるのではないだろうか。

文字の読み書きも計算もほとんどできない「形式卒業者」が、そのまま黙って夜間中学で学びながら、“虐げられてきた哀しみ”を憂い、そのなかで“学べる喜び”を伝えていれば、F は夜間中学で孤立しなかっただろう。教師のコントロール下で羽ばたく“理想的な当事者”ではなかった F は、ある意味、管理教育の連鎖を断ち切る存在でもあった。

解放教育や夜間中学増設運動に関わるリベラルな教師が敵とみなす管理教育の再生産が行われた結果、F は「爆発」し、暴走し、高野が言う「普通の娘さんが持っている現実感覚」⁶⁰⁾を失ってしまったのである。

お わ り に

夜間中学で様々なことを学んだ結果、「形式卒業者」である自身が被抑圧者であることに気づいた F は、自らの解放と仲間や弟妹の救済を求めて必死に叫び続けた。

「形式卒業者」として自分を晒して社会に訴えかけた F が、自殺を選択するほど孤立してしまった要因を作ったのは、夜間中学の教師であった。本来なら一番の味方であるはずの教師が、F を追

57) 江口怜『戦後日本の夜間中学：周縁の義務教育史』東京大学出版会、2022 年、p.192

58) 「意識化」とは、被抑圧者が自分たち（被抑圧者）の置かれている状況の起因を自覚し、自分たちを苦しめている抑圧者の存在を発見することを指す。パウロ・フレイレ（1979）は「意識化」を、抑圧状況からの解放のために欠かせないものと位置づけている。

59) 高野雅夫『夜間中学生 タカノマサオ 武器になる文字とコトバを』1993 年、解放出版社、p.121

60) 1972 年 10 月 16 日に高野が自殺未遂を図った F に送った手紙に「普通の娘さんが持っている現実感覚を取り戻してほしい」という言葉が出てくる。

い込む存在になってしまったのだ。

絶望し、自殺を決意した F の遺書には、殺したい相手として塚原と見城の名が上がっている。F は本当に二人の教師を殺したかったのだろうか。共著者の水本は、「F さん関係の資料の最後の方に、『見城死ね、塚原殺す』など書きなぐった手紙がありますね。私は、これを逆読みしました。『見城先生、見捨てないで』『塚原先生、唯一の望みの綱ですッ』と」⁶¹⁾と述べる。

自殺未遂後、F は荒川九中から別の夜間中学に移り、そこで学びながら鍼灸理療学校に進む。その後結婚した F は、30 歳の時に出産したばかりの子どもの様子を綴った手紙を高野の長男に向けて送っている。それが F から高野への最後の連絡であった。

「形式卒業者」の夜間中学入学が認められた現在、F はどのような気持ちで夜間中学を見つめているのだろうか。文科省の“遅すぎた対応”の根幹にあった義務教育の矛盾が、全て解消されたとは言い切れない。F の訴えのゴールは、制度の改正だけではなく、どんな人でもいつからでも学べる、学び直しができる社会になった先にある。

追 記

本稿は、科学研究費・基盤研究 C「夜間中学における教育実践とその学びに関する研究－夜間中学生の過去・現在・未来－」における研究成果の一部を反映している。

参 考 文 献

- 江口怜『戦後日本の夜間中学：周縁の義務教育史』東京大学出版会、2022 年
 大多和雅絵『戦後 夜間中学校の歴史』六花出版、2017 年
 高野雅夫『夜間中学生 タカノマサオ 武器になる文字とコトバを』解放出版社、1993 年
 高野雅夫『ルンプロ元年 자립』修羅書房、1975 年
 塚原雄太『夜間中学 疎外された「義務教育」』社会新報、1969 年
 パウロ・フレイレ『被抑圧者の教育学』亜紀書房、1979 年
 松崎運之介『夜間中学の歴史』東京都夜間中学校研究会資料室、1976 年
 松崎運之介『夜間中学－その歴史と現在』白石書店、1979 年

61) 2022 年 10 月 16 日のメール文より引用。